

形 式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	Nonmelanoma skin malignancies	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Sentinel lymphonodectomy in nonmelanoma skin malignancies	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ガイドライン上での目次名称	SCCCQ6-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー／メタアナリシス II. 1 つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	149	
	号	4	
	ページ	763-769	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2003	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Michl C	Department of Dermatology and Allergology, Klinikum Augsburg, Germany.
その他著者 1		Starz H	
その他著者 2		Bachter D	
その他著者 3			
その他著者 4			
その他著者 5			
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	Non-melanoma skin cancer についてセンチネルリンパ節生検の妥当性を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	1 施設	
	対象者	High risk の non-melanoma skin cancer 37 名が対象。そのうち squamous cell carcinoma は 11 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 12 ）	
	介入（要因曝露）	センチネルリンパ節生検	
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分
	1	同定率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	偽陰性率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	3	無病期間	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	High risk の non-melanoma skin cancer37 名が対象。そのうち squamous cell carcinoma は 11 例であった。11 例中 2 例にセンチネルリンパ節転移が認められたため、根治的リンパ節郭を行ったところ、2 例ともセンチネルリンパ節以外のリンパ節にも有棘細胞癌の転移がみられた。その後、37 症例に対し、平均 2.5 年の経過観察（中央値 2.4 年）を行っており、センチネルリンパ節転移陰性の症例に再発転移はみられなかった。	
	結論	センチネルリンパ節生検はハイリスクの non-melanoma skin cancer においてリンパ節の微小転移を鋭敏に見つけ出す方法である。このことによってより正確なステージ分類が可能である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	山崎直也	

	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅳ　　） 有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検は日本では実地医療に導入されつつあるように思われるが、欧米でもまだ、予後に関わる有用性は明らかにされていない。少数例で症例集積研究ともいえるが、比較的まとまった症例数を長期詳細に観察しており、後ろ向きコホート研究に準ずるものと評価した。
--	------------	---